

自由社会の哲学 (1)

吉 澤 昌 恭

第一章 変 化 と 恐 怖

I ポパー vs. 歴史主義

ポパー (Karl Raimund Popper) は、二十世紀が生み出した最も魅力ある哲学者のひとりである。彼は、人も知る科学哲学、科学方法論の大家である。また、ナチズムの嵐がヨーロッパ大陸を吹き荒れている時代に、彼はニュージーランドへの亡命を余儀なくされている。筆者がポパーにこの上もなく魅力を感じるのには、彼が抽象的な哲学上の問題に取り組んでいるばかりか、社会問題にも多大の関心を払っているからである。そして、彼は徹底したデモクラシーの擁護者である。認識論の領域でのあくことなき探求を続けると同時に、社会哲学の著作を物すという点に於いて、ポパーは、バートランド・ラッセルと好一對を成している。

ここでは、ポパーの社会哲学を論じてみようというわけである。

* * *

ここでの議論の対象となるのは、『自由社会の哲学とその論敵』^{*}並びに『歴史主義の貧困』^{**}の二著作である。この二著作を一貫して流れるメイン

* *The Open Society and its Enemies*, Routledge & Kegan Paul, London 1945
(武田弘道訳『自由社会の哲学とその論敵』, 世界思想社 昭和48年)

** *The Poverty of Historicism*, Routledge & Kegan Paul, London 1957 (久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』, 中央公論社 昭和36年)

・テーマは、全体主義への挑戦と、全体主義に代わるものとしての民主主義的な社会改良の諸原理の提示とである。ポパーによれば、全体主義者の陣営の内でも最も強力なものが歴史主義（historicism）なのである。ポパーの言う歴史主義とは、歴史的な予測が社会科学の主要目的である、と考える社会科学への一接近法のことである。この接近法の主張するところによれば、歴史予測という社会科学の主要目的は、歴史の進化の基底に横たわる「リズム」や「パターン」、「法則」や「傾向」を発見することによって達成され得るのである。

しかしながら、ポパーによれば、社会科学の主要任務は歴史の行く末を予測することではないばかりか、遠い将来を予測することは全く不可能でもある。遠い将来の予測が不可能であることの証明として、次の五つの言明が、『歴史主義の貧困』の冒頭部分に掲げられている。

- (1) 人間の歴史の経過は、人間の知識が成長することによって、はなはだしく影響を受ける。
- (2) 合理的もしくは科学的方法によって、我々の科学的知識が将来どのように成長するか、を予測することは我々にはできない。
- (3) 従って、我々は人間の歴史の未来の経過を予測することができない。
- (4) このことは、我々が理論歴史学（theoretical history）の可能性を否定しなければならない、ということを意味している。即ち、理論物理学（theoretical physics）に対応するような歴史的社会科学の可能性を否定しなければならない、というわけである。歴史的予測の根拠として役立つような、歴史の発展に関する科学的理論は何ら存在し得ないのである。
- (5) 従って、歴史主義的方法の基本的な狙いは誤謬に基づくものである。かくて、歴史主義は瓦壊する。

*

*

*

ポパーによれば、歴史主義の最も有力な代表者がプラトンとマルクスである。前者にあつては、その歴史主義は悲観論と結びついている。つまり、あらゆる変化は衰亡への動きに外ならず、従つて、全ての変化は阻止されねばならない、ということになる。他方、後者に於いては、楽観論が優位している。従つて、変化は即ち発展なのであつて、望ましいものなのである。

悲観論の形態のものであれ、楽観論の形態のものであれ、歴史主義は社会哲学・政治哲学に有害な影響を及ぼし続けてきたのであり、それは克服されねばならない。

本章の以下の部分では、ポパーがプラトンについて論じている所を紹介することにする。また、次章では、マルクスについてのポパーの解釈を取り上げることにする。そして、次稿で、ポパー自身のより積極的で建設的な議論、即ち、民主主義的な社会改良の諸原理を検討してみることにしよう。

II 変化と恐怖

「プラトンの呪縛」(The Spell of Plato) と題された、『自由社会の哲学とその論敵』の第一巻では、社会環境の変化が、時として言いようのない不安や恐怖をもたらし得る、ということが論じられている。

初期ギリシアの哲学者達によって提示された種々の歴史主義の構想はプラトンに於いて最高潮に達した、とポパーは言う。プラトンの歴史主義にとりわけ影響を与えたのがヘラクレイトスであつた。「万物は流転し、何物も静止しない」というヘラクレイトスの発見は一大革新であり、その後のギリシア哲学に多大の影響を与え続けたのである。勿論、変化の強調それ自体は何ら有害なことではない。しかし、ヘラクレイトスの場合、行き過ぎがあつたし、同じことはその後の歴史主義の信奉者にも等しく当てはまる、とポパーは言う。つまり、変化があまりにも強調され過ぎることと、変化さえをも支配する不変の運命法則への信仰がそれである。

歴史主義者は無意識の内に変化というものに抵抗を感じており、それを克服するためにかくも変化が強調されるのであろう、とポパーは推測している。歴史主義者達は変化をこわがっており、重大な心理的葛藤なしには変化を受け付けることができない可能性が大いにある、というわけなのである。かくして、安定した世界を失ったことに由来する情動不安を癒すために、変化それ自体をも支配する不変の法則という構想にしがみつくなることが必要となるのであろう。

「万物の流転」というヘラクレイトスの構想は、彼が社会革命の時代に生きたことと無関係ではない、ということをポパーは匂わせている。そして、プラトンは、ヘラクレイトスの時代以上に動揺した時代を生きたのである。プラトンは「万物の流転」説をヘラクレイトスと共有した。その場合の変化とは衰亡への動きに外ならなかった。しかし、プラトンは歴史主義にひとつの風穴をあけたのである。彼は、人間の努力によって、或いはむしろ神にも比肩し得る程の人 (superhuman) の努力によって、免がれ難い歴史の傾向を打ち破り、衰亡の過程を終結させることが可能である、と信じたのである。

しかし、こうした留保条件を付けることによって、プラトンの歴史主義は不徹底で限界を持ったものになる、とポパーは言う。なぜなら、妥協なしの完全発育の歴史主義ならば、人間が歴史の運命法則を変え得る、といったことを容認するのに躊躇するであろうからである。

以上のような議論が、『自由社会の哲学とその論敵』の第二章並びに第三章の最初の三つの節で展開されている。

* * *

いずれにせよ、衰亡へ向う歴史の傾向を逆転させ、理想の国家を実現する、という可能性がプラトんに残されたわけである。しかし、プラトンの理想国家とは全ての変化を免がれている国家であり、化石化した国家である。こうした国家を実現しようとする試みは全体主義を招来することにな

る。『自由社会の哲学とその論敵』の第六章冒頭部分で、プラトンの政治哲学が全体主義のそれであることが明らかにされる。ポパーによれば、プラトンの政治上の基本的要求は次の二つに要約される。

- (1) 全ての政治変動を停止せよ。
- (2) 自然へ帰れ。

ポパーによれば、これら二つのものから、プラトンの政治哲学を構成する下記の如き要素を引き出し得るのである。

- (A) 階級間の厳密な区分；即ち、牧夫と番犬から成る支配階級は人間家畜から厳密に区別されねばならない。
- (B) 国家の運命と支配階級の運命の同一視；支配階級とその統一への没頭；この統一に役立つものとしての、この階級の養育と教育のための厳重な規則並びに、その成員の利害の厳密な監視と集団統制。
- (C) 支配階級は軍事上の徳や訓練を独占し、また、武器を携行したり各種の教育を受けたりする権利を独占する；しかし、支配階級は、経済活動への参加から、そしてとりわけ金儲けから閉め出される。
- (D) 支配階級の全ての知的活動についての検閲と、彼らの心を型にはめ統一することを狙う持続的な宣伝活動とが存在しなければならない。教育、立法、宗教に於ける全ての革新は防止されるか抑圧されねばならない。
- (E) 国家は自足していなければならない。国家は経済上の自給を目指さねばならない；さもなければ、支配者が貿易業者に依存するようになるか、或いは貿易業者になってしまうからである。これらの選択肢の内の第一のものは、彼らの権力をむしろむくことになろうし、第二のものは彼らの統一や国家の安定性をむしろむくことになろう。

プラトンの政治哲学についてのポパーの結論はこうである。それは純粹に全体主義的で反人道主義的である。

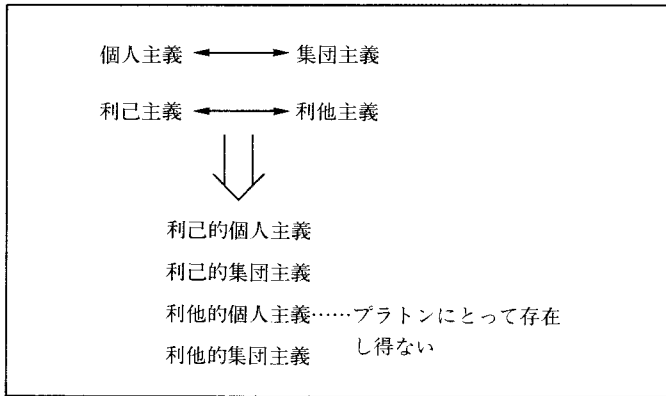
* * *

続いて、人道主義者が「正義」という語を用いる時にそれが意味するものと、プラトンがその語を用いる時に意味するものとが比較される。ポパーによれば、人道主義者にとっては「正義」は次のようなことを意味している。

- (1) 市民が担うべき負担、即ち、社会生活を営む上で必要な自由の制限の平等な配分。
- (2) 法の前での市民の平等な扱い。
- (3) 法が特定の市民、集団、階級を優遇したり冷遇したりすることの禁止。
- (4) 裁判所の公平。
- (5) 市民が国家の構成員であることによって得られる恩恵や負担の平等な割り当て。

それに対して、プラトンによって用いられる「正義」の語は「最善の国家が関心を持つもの」と同義語である、とポパーは言う。

人道主義者にとっては、個々の市民が非常に重要な存在である。プラトンにとってはそうではない。こうしたプラトン流の議論は、ひとつのトリックを用いることによって、非常にもっともらしいものにすることができる。つまり、個人主義 (individualism) と利己主義 (egoism) の同一視がそれである。利己主義は排除されねばならず、更にまた、個人主義は利己主義の別名に外ならないが故に、利他的個人主義といったものが存在し得ないのであれば、望ましい選択肢として残るものは、利他主義 (altruism) と集団主義 (collectivism) の結合物たる利他的集団主義しかない、という



風に思えてくるに相違ない。

しかしながら、「個人主義—集団主義」「利己主義—利他主義」という二組の対概念から四通りの組み合わせを導き出せることは明らかである。慈愛心に満ち満ちた利他的な個人主義者を想像することは可能である。仮に、そのような人間が現実には存在しないとしても、利他的な個人主義者をひとつの理想像にすることに対する障害は何ら存在しないように思われるのである。

Ⅲ 自由社会の哲学

『自由社会の哲学とその論敵』の第十章へ進むことにしよう。この章は同書第一巻の最終章であり、同書全体を通じて最も迫力のある部分である。

西洋文明はギリシアびと達と共に始まった、とポパーは言う。彼らは部族生活から人道思想へ、閉じた社会 (the closed society) から開いた社会 (the open society) への道を歩み始めたのである。部族社会とは閉じた社会である。そこでは、概して、慣習が非常に厳格なものであり、また、人々はその慣習に対して呪術的・非合理的な態度で服従する。こうしたことが起るのは、社会生活上の規約つまり慣習と、自然法則とが区別されることがなく、両者が共に超自然の意志によって人間に押しつけられたもので

ある、といった信念が存在するからである。社会生活上の規約が有無を言わせぬタブーとなって、社会生活のあらゆる側面を厳格に規制し支配しているような社会では、真の道德問題は何ら存在し得ない、とポパーは言う。成程、部族の構成員がタブーに合わせて行動するためには、時として非常な英雄的精神や限りない忍耐力が必要になるかもしれない。しかし、彼が、いかに行動すればよいか、といった疑問に道德的な意味で悩まされることは滅多にない。なぜなら、為す「べき」こと（或いはむしろ、為す「べからざる」こと）は、常に、タブーによって決定されているからである。

そしてまた、閉じた社会は具体的な個人と具体的な個人が相互に関係し合っている社会でもある。彼らは、「触れる」「嗅ぐ」「見る」といった行為によって、お互いを確認し合うことができるのである。

他方、開いた社会とは社会生活上の規約を変更し得る可能性を秘めた社会である。従来の規約をそのまま存続させるか、それともそれに変更を加えるか、の決定は最終的には個々人の決断に委ねられることとなる。そうした社会に於いてのみ、人道主義が花開く可能性が存在し得るのである。

しかし、この開いた社会とは、「抽象的な」社会関係が刻一刻と重要性を増してゆく社会でもある。ある人の生活は、顔も見たことのない他人の行動に決定的に依存したものになってゆく。地球の裏側で起った出来事が我が身の破滅につながるかもしれないのである。人々は、親密であたたかみのある個人的な人間関係を徐々に失ってゆく。或いはまた、そうした個人的な人間関係を維持し得る人であっても、その人間関係が持つ重要性は段々と低下してゆく。誰にも知られることがなく、また誰にも顧みられないこともない人々、無力感と孤立感に打ちひしがれている人々の数が増大してゆく。

確かに人間は、抽象的な社会関係ただそれだけで満足し得ない存在のようである。

閉じた社会から開いた社会への移行は、人類が今までに経験してきた最も深刻な革命のひとつである、とポパーは言う。この革命はまだ初期の段階にあり、今尚、その損失がはるかに人目を惹く状態にある。開いた社会の理想を信じ、人道思想に奉じようとする者は、閉じた社会が崩壊することによって生み出される重圧に耐える気構えを持たねばならない。人は、合理的であろうと努力し続けなければならない。いくつかの情念は抑制されねばならない。自己を見つめ、自己の下した決断に対して責任を負わねばならない。こうしたことは、人間に大いなる緊張を強いることであろう。

全体主義は、閉じた社会の崩壊がもたらすこうした重圧に対する、ひとつの解毒剤となり得るのである。ポパーは次の如くに述べている。

現在の全体主義との類比でプラトンを理解しようと試みるうちに、自分でも驚いたことに、私は全体主義についての見解を修正するに到ったのである。その試みが全体主義に対する私の敵意を緩和することはなかったけれども、その試みによって私は究極的に次のことを理解できたのである。古いものであれ新しいものであれ、全体主義の力の源は、いかに誤ったものであったにせよ、それが非常に重大な困難に対して解答を与えようと試みた、という事実の内に存するのである。

従って、プラトンの試みは単なるプロパガンダなどではなく、実に真剣なものだったのである。再びポパーの言葉を引いておこう。

プラトンは、その深い社会学的な洞察によって、彼の同時代人が厳しい緊張感によって苦しめられているということを、そして、この緊張感は、デモクラシーや個人主義の勃興と共に始まった社会革命に由来するものであるということを、発見したのである。彼は彼ら同時代人の根深い不幸の主要原因の発見に成功し、その原因と戦うことに全力を尽くした。その原因とは即ち、社会変動であり、社会不和であ

る。彼の最も強力な動機のひとつが市民達に幸福を取りもどすことであった、ということを疑う理由は何ら存在しないのである。

しかし、こうしたプラトンの試みは、ソクラテスに対する裏切りなしには、遂行し得なかった、とポパーは言う。

プラトンの裏切りの事実を、そして、『国家』での主役の語り手としてソクラテスを用いたことが彼を巻き添えにしようとする最も上首尾な企てであった、ということを私は疑うことができない。

しかし、プラトンはソクラテスに対する自らの裏切りを自覚していたのであり、また、そのことが、西洋哲学史上最大の巨人に心理的葛藤をもたらしたのである、とポパーは言う。

ソクラテスの教えは実際自分の演出したものと大いに異なっており、自分がソクラテスに対する裏切りを行いつつある、と彼はその魂の奥深い所で感じていた、と私は信ずる。そして、ソクラテスにソクラテス自身への問いかけをさせるプラトンのたゆまない努力は、同時に、プラトンは彼自身の良心の痛みを鎮めようとする努力であった、と私は考える。

プラトンを読み進むうちに、我々は内的葛藤を、即ち、プラトンの心の中での真の巨人の格闘を見い出すことになる、と私は感ずる。…中略…ひとつの魂の内に存在する二つの世界の間でのこの葛藤、プラトンは大きな影響を及ぼし、また押し殺された自己主張の背後に感じることのできる格闘。プラトンの影響力は、一部分、そうしたものがもたらす魅力によって説明することができる、と私は信ずる。この格闘は我々の感動を誘う。というのも、それが今も尚、我々自身の内

部に於いて続いているからである。(傍点, 吉澤)

* * *

たとえプラトンの意図がいかに真剣なものであったにせよ、彼の提示する処方箋は、開いた社会の理想を信じ、人道思想に奉じようとする者にとって受け容れることのできないものである。「プラトンの呪縛」と題された第一巻最終章最終節のポパーの言葉をもって、本章のしめくくりとすることにしよう。

政治上の変動を停止することは解決策とはならない。それは幸福をもたらす得ない。我々が閉じた社会の潔白さや美しさにもどることができる、というのは決して十分に根拠のあることではない。天上の夢を地上に実現することはできない。ひとたび我々が自らの理性を頼りにし、自らの批判能力を用い始めるならば、そしてひとたび我々が人間としての責任の呼び声を、そしてそれと共に、知識の発展に寄与する責任の呼び声を感ずるならば、我々は部族の魔術に盲目的に服従するといった状態に帰ることはできない。知恵の樹から食べた者には楽園は失われる。部族生活の英雄時代へ帰ろうと我々が努めれば努める程、それだけ確実に我々は、宗教裁判へ、秘密警察へ、そして暴力賛美主義へと導かれてゆく。理性と真理の抑圧を皮切りに、我々は、人間的なもの全てを最も野蛮で暴力的な形で破壊し尽くすことになるに相違ない。調和した自然状態へもどるための道はどこにも存在しない。もし我々が後もどりを始めるなら、我々は今まで歩んできた道全部をもどらなければならない。そして、我々は野獣にもどらなければならない。…中略…もし我々が人間であり続けることを望むなら、道はただひとつしかない。即ち、開いた社会に通ずる道である。安全と自由のために可能な限り計画を立てるべく理性を用いることによって、未知で、不確定で、不安な世界へと進み続けなければならないのである。

第二章 人道主義と歴史主義

I マルクス思想の構成要素

本章では、マルクスの思想をポパーがいかにように解釈しているか、を紹介することにしよう。『自由社会の哲学とその論敵』の第二巻の大部分（第13章～第22章）が、マルクスの思想の分析に当てられている。それによると、マルクスの思想は、ポパーの非常に高く評価するものとポパーが攻撃して止まないものから成り立っている。

マルクスが人道主義思想の信奉者であることに疑いの余地はない、とポパーは言う。マルクスは社会生活に於ける最も切迫した問題に、合理的な方法をもって誠実に対処しようと試みたのである。こうした試みの価値が、その失敗によって減じることはない。ポパーによれば、マルクスの人生観の核心は次の様に要約できる。精根尽きはてるようなそしてまた人間の尊厳を傷つけるような労働条件に改良を加え、それをもっと人間にふさわしいものにし、平等化し、更に、単調な骨折り仕事を減少させて全ての人間がその生活のなにがしかの部分に自由を楽しめるようにすること。

その上、ポパーは、マルクスの真理探求の真剣さと知的誠実さを高く評価しており、これらの点に於いて彼と彼の追随者の多くの者とが分かたれる、と断言する。

しかしながら、マルクスの思想には害毒を流し続けてきたいまひとつの要素が存在する。ヘーゲル流弁証法によって変容を受けた歴史主義がそれである。第一に、この歴史主義によってマルクスは虚偽の予言者になった、とポパーは言う。マルクスは、歴史予測が社会科学の主要目的である、ということを経多くの知識人に信じさせるのに成功したのである。歴史予測は社会科学の主要目的ではないし、また、歴史予測をすることなどは全く不可能である、というのがポパーの基本的な考え方である。従って、歴史予測に重きを置く歴史主義は貧困な方法だということになる。貧困な方法が

ら生み出される帰結は、当然、貧困なものとならざるを得ない。かくして、資本主義社会の運命を占ったマルクスの予言は惨憺たるものにならざるを得ないというわけである。マルクスの予言に対するポパーの分析をⅡで紹介することにする。

第二に、マルクスは、歴史主義によって、全ての社会技術をユートピア流とけなし、それを禁止する、という方向へ導かれていったのである。これは、漸次的な社会改良への道を閉ざし、やがては、非合理主義や神がかり哲学への道を用意しかねないものとなる。時として、マルクス思想の宗教性が声高に叫ばれることの源はこの点に存する、と言わねばならない。これらの点については、次稿で改めて論ずることにする。

第三に、歴史主義は、大いに反人道主義的なものとなりかねない、独特の道徳理論へとマルクスを導いていったのである。人道主義思想への尊敬の念を持たぬ後継者達によってマルクス思想が受け継がれた時、その帰結は憂慮すべきものとなってゆく。本章の最後の部分では、歴史主義の道徳理論について論ずることにする。

Ⅱ 予言の評価

マルクスは、資本主義社会の運命を予言することに非常に多くのエネルギーを注いでいる。ポパーによれば、マルクスの予言は次の三段階から成り立っている。

- (1) 資本主義社会に於ける経済諸力と階級間の力関係の分析
- (2) 社会革命の不可避性の予言
- (3) 無階級社会出現の予言

これら三つのものの内、第一のものにマルクスは最も多くの精力を注ぎ込んだのではあるが、第二・第三の要因も、マルクス思想の絶大なる影響力を説明する上で、欠かすことのできない要因である。

ポパーは、マルクスの予言を批判的に吟味するに当って、マルクスとは逆の手順を踏んで、(3)の無階級社会出現の予言の吟味から始めて、(2)、(1)へと進んでゆく。こうすることによって、論証の各段階での前提を真だと仮定することが容易になり、各々の段階で得られる結論がその段階での前提から導出し得るのか否か、に焦点を当てることが可能になる。

	マルクス	ポパー
富と貧困の増大	前提 { <ul style="list-style-type: none"> ① 競争と蓄積 自由労働市場 ② 景気循環と失業 利潤率の低下 ↓↓ 結論 { <ul style="list-style-type: none"> 資本の蓄積→富の増大 資本の集中 貧困の増大 	労働組合、労働者保護のための法律 逆循環政策・失業保険 ・ 資本家が搾取を一層強化するとは限らない 富の増大=妥当 資本の集中=疑わしい ← { 遺産相続税 貧困の増大=疑わしい ← 反トラスト法
社会革命の到来	前提-富と貧困の増大 ↓↓ 結論 { <ul style="list-style-type: none"> 中間階級の消滅 社会革命の到来 	中間階級が消滅するとは限らない 社会革命は避けられるかもしれない
無階級社会の出現	前提-社会革命の到来 ↓↓ 結論 { <ul style="list-style-type: none"> プロレタリアートの勝利 無階級社会の出現 	プロレタリアートは勝利し得る 無階級社会が出現するとは限らない

ポパーによって定式化されたマルクスの論証と、それに対するポパーの判定とを図式化するならば、前頁の表の如くなる。以下では、この表に従って論を進めてゆくことにする。(但し、ポパーの提案する手順に従って、無階級社会の出現の可否から始めることにする。)

* * *

まず、社会革命が起ったならば、無階級社会が出現するか否か、を吟味してみよう。ポパーによれば、社会革命の到来という前提から、マルクスは(A)プロレタリア階級の勝利、(B)無階級社会の出現、という二つの結論を引き出している。結論(A)は容認可能である、とポパーは考えている。ブルジョアジーは数が少ないばかりでなく、その肉体的生存に関して、プロレタリアートに依存している。雄蜂の如き搾取者は被搾取者がいなければ飢えてしまう。他方、プロレタリアートは、肉体的生存に関して、何らブルジョアジーに依存する必要はない。それ故に、プロレタリアートがいったん現状秩序に挑戦しようと決断し、反乱を起してしまうならば、ブルジョアジーはその本質的な社会的機能を喪失してしまう。かくして、プロレタリアートは自らの生存を危険にさらすことなく、自分達の階級の敵を打ち倒すことができるのである。

それに対して、結論(B)は受容できない、とポパーは言う。マルクス自身の分析によれば、階級の統一や団結は階級意識の一部であって、その階級意識それ自体が階級闘争の産物なのである。プロレタリアートを形成している人々が、階級の共通の敵に対する闘争に由来する圧力が消滅した後も、自分達の階級の統一を保持すべきである、と考えるかどうかは大いに疑問である。従って、最も起りそうな展開は次の如きものとなる。勝利の瞬間に実際に権力の座についている人々、即ち、権力闘争や様々な粛正を生きてきた革命指導者達が、「新階級」つまり一種の貴族制でありまた官僚制でもある新しい支配階級を形成し、彼らがそうした新階級の形成の事実を隠そうと企てる、といったことが極めてありそうなことである。彼ら

は可能な限り革命のイデオロギーを保存し、それを自分達の権力を安定させるための手段として用いることであろう。

言うまでもないことだが、ポパーは、無階級社会は絶対に出現し得ない、と主張しているわけではない。ポパーの否定しているのは、社会革命の唯一の帰結が無階級社会だ、という主張である。社会革命の後に可能だと考えられる展開には実に多くのものがある。その可能性の多さが、歴史上の予言という方法を不可能にさせるのである。無階級社会以外の可能性を好まないからといって、それ以外のものに目を閉ざすというのでは、非科学的だとの非難は免かれ得ない。願望を込めた思考は科学的な思考だとは言えない。勿論、そうした願望を込めた思考に由来する予言が、大多数の民衆に逃避の場を、従って、大いなる慰安を与える、といったことが起り得るのは確かであるが、それはまた同時に、非合理主義や神がかり哲学へと通ずる扉を開くことにもなるのである。

* * *

論証の第二段階へ進むことにしよう。ここでの前提は、資本主義社会に於いては、一方で、数の上で減少してゆくブルジョアジーの富が増大してゆく反面、他方で、数の上で増加してゆくプロレタリアートの貧困は深刻化してゆく（もしくは、貧困の状態は著しく改善されることはない）、というものである。この富と貧困の増大という前提からマルクスによって引き出された結論は、(A)中間階級の消滅、(B)プロレタリアートによる社会革命の到来、の二つである。

これら二つの結論をその前提から導出することはできない、とポパーは言う。マルクスの論証に於いては、多くの可能な展開が無視されているのである。

中間階級の消滅は多くの可能なものの内のひとつに過ぎない。富と貧困の増大という前提が正しければ、弱小資本家やプチブルジョアジーといったある種の間階級が消滅することは確かである。しかし、その前提から、

農業に携わる者全てが産業プロレタリアートの地位に落ちぶれてゆく、という結論を引き出すことはできない。大地主や自作農は存続し続けるであろう。また、農業労働者は時として主人たる大地主や農民に余りにも依存し過ぎているために、産業プロレタリアートと協同戦線など張れないかもしれない。このことは、農村プロレタリアートと産業プロレタリアートが団結しないでいることが、少なくとも可能なことを示している。

更にまた、産業プロレタリアートそれ自体の内部に於いても、分裂が生じるかもしれない。一方では、肉体労働者に対しては優越感を持ちながら、同時に支配者の慈悲にすがってゆこうとする特権的な賃労働者群、といった新しい中間階級が生み出されるかもしれない。他方、ルンペン・プロレタリアートと呼ばれる社会の最下層を形成する人々が存在する。それは、常に我が身を階級の敵に売り渡してもよいという犯罪者の補給源となり得るのである。

かくして、富と貧困の増大を前提にするならば、次の如き要因から成る階級構造が出現することになりそうである。

- ① ブルジョアジー
- ② 大地主
- ③ その他の土地所有者
- ④ 農村労働者
- ⑤ 新中間階級
- ⑥ 産業労働者
- ⑦ ルンペン・プロレタリアート

結論(B)へ進むことにしよう。結論(A)が妥当でない以上、富と貧困の増大という前提から、社会革命の不可避性についての結論(B)を引き出すことはできない。階級構造がブルジョアジーと産業プロレタリアートへと二極化することなく、多元的なものであり続けるならば、支配者層が、被支配者

層の分裂を助長することによって、社会革命を回避し得るかもしれない。勿論、革命は起るかもしれないが、それが起るか否かは、富と貧困の増大以外の多くの要因によっても左右されるのである。

* * *

さて、論証の第一段階へ進むことにしよう。この部分は、マルクスの全理論の内でも最も重要な部分であり、また、最も抽象度の少ない部分でもある。論証のこの段階に於ける前提は、(Ⅰ)資本家間の競争と資本蓄積、という主前提並びに、(Ⅱ)自由労働市場、(Ⅲ)景気循環とその帰結としての失業、(Ⅳ)利潤率の低下、という三つの副次的前提とから成り立っている。これら四つの前提から、(A)富の増大、(B)資本の集中、(C)貧困の増大、という三つの結論が導き出されてくる。

マルクスの予言に対するポパーの批判的議論の、この段階に於いては、前提から結論が引き出し得るか否か、が吟味されるばかりでなく、三つの副次的前提そのものに対しても批評が加えられる。

結論(A)は、ポパーの論評を待つまでもなく、妥当なものであると言っていいだろう。資本家間の競争を通じて、益々多くの資本が蓄積され、その結果として労働の生産性が大いに高められ、益々多くの富が生み出されてきた、ということに疑いの余地はないように思われる。

しかし、結論(B)は手放しで容認できる類のものではない。資本家間の競争が弱小資本家を敗退させ、資本が益々少数の資本家の掌中に集中してゆく、といった過程が際限もなく進んでゆくとは考えにくい。少なくとも、高率の遺産相続税によって資本の集中に何らかの歯止めをかけることも可能だろうし、反トラスト法もなにがしかの効果を発揮し得るであろう。

結論(B)の当否は、結論(C)の当否にも関わり合ってくる。貧困の増大という場合、それはマルクスにとって、貧困に苦しむ人の割合の上昇と貧困の強度そのものの上昇とを意味していたと考えられる。結論(B)が妥当性を欠くならば、貧困者層の拡大という結論にも疑問が生じざるを得ないである

う。(更に、論証の第二段階で、「中間階級の消滅」という命題が疑問視されたことをも想起せよ。) それでは、貧困の度合そのものが一層ひどくなったという結論はどうであろうか。マルクスの生きた時代ならいざしらず、現代に生きる我々にとって、プロレタリアートの生活は益々ひどいものとなりつつある、といった命題を信じることはほとんど不可能である。少なくとも、第二次大戦以降の先進国に於ける一般大衆の生活水準は、明らかに上昇してきたように見える。少なくとも、筆者にはそう見える。それでは何故に、マルクスの予言に反してこういったことが起ったのだろうか？ 三つの副次的前提を検討することによって、そうした事態を何程か解明できるだろう。

副次的前提(Ⅲ)と(Ⅳ)が正しいならば、即ち、労働者が単独で資本家に対峙さねばならず、また、大量の失業者が巷に溢れているならば、労働者の受け取れる賃金は飢餓賃金以上に出ないであろう。一方で、資本蓄積を通して社会全体の富が増大しているにもかかわらず、他方で、飢餓線上をさまよう多くのプロレタリアートが存在する、といった事態は、健全な道德感覚の持主には許し難いことであろう。しかし、今日では、前提(Ⅲ)も前提(Ⅳ)も、いずれも、マルクスの生きた時代と同じ形で妥当するのではない。今日では、強力な労働組合が存在しており、これが資本家と団体交渉を行っている。また、労働者を保護するための様々な法律が存在する。景気循環を緩和するために、多くの政策的措置が講じられる。(ポパーは、これに「逆循環政策」という呼称を与えている。)そして、失業者の生活苦を緩和するために、失業保険制度が設けられている。

今日の先進諸国に於いてすらプロレタリアートの困窮度が深まっていると言う者がいるとすれば、それは現実を見ようとしない人である。そうした人に対してはいかなる議論も通じないに違いないだろうから、議論するだけ無駄というものである。

前提(Ⅳ)に対しても批判的議論を加えねばならない。マルクスによって提唱された利潤率低下の法則それ自体が、大いに疑問の余地のあるものであ

る。しかし、仮にこの法則が正しいとした場合ですら、この仮定から、「資本家による労働者に対する搾取の一層の強化」という結論を直ちに導き出すことはできない。一方で、資本蓄積は利潤を生み出す資本を増大させる。他方、資本蓄積によって利潤率が低下するのであれば、一単位当りの資本から得られる利潤は減少する。いずれの要因が優位するか、をア・プリオリに決定することはできない。しかし、利潤率の低下が資本家の受け取る利潤総額を減少させる程までに著しい、とは考えにくい。こうした事態が起り得るか否か、を決するためには一層の分析が必要となろう。それに反して、利潤率の低下がそれ程著しくはなく、資本家の受け取る利潤総額は増大してゆく、と想定する方がはるかに無理のない想定のように思われる。

もし、利潤総額が増大してゆくのであれば、資本家が次の様に考える可能性を排除することはできなくなる。「自分の収入は増加し続けているし、今後も増加し続けるだろう。それにもかかわらず、更に労働者達に対する搾取を強化して、彼らとの間により一層の軋轢を生じさせる必要があろうか。恐らく、それは賢明なことではないに違いない。」

* * *

資本主義社会の運命を予言しようとするマルクスの試みは失敗であった、とポパーは断言する。『自由社会の哲学とその論敵』の第二十一章冒頭部分から、ポパーの言葉を引いておこう。

当時の経済上の諸傾向の観察から予言的結論を引き出そうとする彼〔＝マルクス〕の独創的な企ては失敗であった。議論に際しての経験的な基礎が不十分だった、ということがこうした失敗の理由なのでは決していない。当時の社会に対するマルクスの社会学的分析と経済分析とは幾分か偏ったものであったかもしれないが、その偏向にもかかわらず、それらが記述的である限りに於いて優秀なものであった。予言者としての彼の失敗は正しく歴史主義そのものの貧困に由来している。即ち、たと

え我々が今日、歴史的な傾向とか或いは趨勢とか見えるようなものを観察したとしても、それが明日も同じような姿を現わすか否か、を我々は知ることができない。この単純な事実が彼を失敗させたのである。

マルクス自身の残余の部分と比べると、彼の十把一からげに近い予言の知的水準は著しく低い、とポパーは言う。それは願望を込めた思考を大量に含んでおり、また、政治についての想像力にも欠けている。マルクスは、進歩の法則に対する信仰を、彼の同時代人と共有していたのである。しかし、楽観論によって色どられた運命法則への信仰は、ヘラクレイトスやプラトンの悲観論の場合と同様に、迷信である。それは歴史家の想像力にたがをはめ、およそ政治の世界では何が起こるかしたたものではない、という原理を政治学者に禁ずるものとなる。

十九世紀に支配的だった進歩の法則への信仰は、政治上の強力な武器となった。当時、苦難に喘いでいたプロレタリアートに、輝く未来が約束されたのである。自分達は進歩の担い手である、という信仰が彼らに吹き込まれた。しかし、他方で、種々の制度を漸次改良してゆくことは、空想主義者のたわごとであるとして、マルクスによって禁じられたのである。可能な限り理性を用いて我々の住む世界を変革してゆく、という考え方と袂を分かつにつれて、マルクスの思想は宗教的信仰の色彩を強めていった。

人道主義に対するマルクス程の信念を持たぬ者が、マルクスからその歴史主義のみを受け継ぐ時、大いに反人道主義的な道徳理論が生み出されることとなったのである。

Ⅲ 歴史主義の道徳理論

マルクスの著作は、暗に、ひとつの倫理学説を含んでおり、彼は、道徳的観点から社会制度を評価するに際して、それを表明した、とポパーは言う。資本主義に対するマルクスの非難は基本的には道徳上の非難である。形式的には完全な正義と公正を備えていながら、はなはだしく残酷な制度

であるが故に、そしてまた、搾取者に被搾取者の奴隷化を余儀なくさせることによって、双方から自由を奪い去ってしまうが故に、資本主義は非難されたのである。

マルクスの倫理学上の構想は明示的に打ち出されることはなかった。それは、彼が説教することに嫌悪感を感じていたからである、とポパーは言う。水をと説教しながら自らは酒を飲む道德家に対して、そしてまた、キリスト教の名の下に貧者の救済に異議を唱えた偽善者に対して憤りを感じたから、彼は偉そうに説教しなかったというわけである。

人は行動で自らの証しを立てるべきである、という主張はマルクスの初期の著作の幾つかでことさらに目立っており、それを能動主義 (activism) と呼ぶことも可能である、とポパーは言う。彼のこの態度は、「哲学者はこの世界をただ様々に解釈してきただけである。しかしながら重要なのはそれを変革することである。」という一節に如実に表わされている。しかし、彼の能動主義的傾向は、やがて、歴史主義によって中和され弱められてゆく。そして彼は予言者へと変身していったのである。彼の能動主義と歴史主義の間には幅広い裂け目がある。理性に信を置く態度は、非合理的な力に身を託さねばならぬとする神秘主義へと移り変っていったのである。

* * *

ポパーが歴史主義的道德理論 (historicist moral theory) と呼ぶものによって、能動主義と歴史主義の裂け目に架橋することができる。次の様な問を発する時に得られるであろう解答を吟味することによって、問題の所在を明らかにすることができるだろう。

何故に、あなたは抑圧された人々を助けようとするのですか？

マルクスなら、その道德上の信念によって次の様に答えたであろう、とポパーは想定している。

私の基本的な決定は、抑圧された人々を助けようとする感傷的な決定ではなく、社会の発展法則に無駄な抵抗をすることはやめようという科学的で合理的な決定である。こうした決定を行って初めて、やがてやって来るに決っているもののための闘いに際して必要な武器を提供してくれる道徳感情を受容し、十分に利用しようとする準備が私に可能になるのである。

やがてやって来るに決っているもの、とはプロレタリアートの勝利である。プロレタリアートの陣営に与する、という決定を科学的予測を基礎にして行った後には、彼らの勝利に寄与すると思われる道徳感情を喚起し、道徳上の議論を大いに展開しても、「科学」を逸脱することにはならないというわけである。

しかしながら、この説をつき詰めてゆくと、それは次の如きものとなる。即ち、

未来の道徳体系を採用せよ！

それは、力は正義なりという説の一変種に過ぎない。この場合には、力の前に「未来の」という修飾語が添えられるわけである。理論構造のみに注目する場合、それは、現存秩序の維持を願う保守派の理論と何ら選ぶところがないのである。一方は今日の支配者に与するのに対して、他方は明日の勝利者に与しようとするからである。

もし、歴史主義的道徳理論の含意をつき詰めて考えていたならば、マルクスはそれを拒絶したであろう、とポパーは言う。なぜなら、マルクスを社会主義へと導いたのは、抑圧された者を助けたいという願望、無残に搾取される労働者を解放したいという願望だったからである。

*

*

*

500年後に奴隷制度が再び復活し、この動きに抵抗しようとするいかなる企ても徒勞に終らざるを得ない、という予言にある人が到達し、彼は自らの予言の正しさを固く信じている、と仮定してみよう。500年後には彼は生きてはいないのだから、彼はこの予言によって何ら影響を受けないかもしれない。或いは彼は、自分の子孫が500年後には奴隷所有者の陣営に属してられるように、考えられる限りのことを行うかもしれない。しかし、もし彼が人道主義思想の信奉者ならば、人道主義思想が500年後にも生きのびていられるようにと、「明らかに無駄だ」と感じられる努力を続けるかもしれない。彼のこの決定は最も賢明な決定とは言えないのかもしれない。それにもかかわらず、人道主義の信奉者ならば彼の決定に賛意を示すであろう。

我々の置かれている状況は決してこれ程悲劇的なものではないに違いない。我々自身の思想、道徳感、そこから生み出される行動は、我々の住む環境によって決定的に規定されている。我々は過去の遺物から完全に自由であることはできない。

しかしながら、我々の思想と行動を決定的に左右する我々の住む社会環境それ自体を、批判的に吟味し、道徳的観点から評価することができるのである。もし、我々の住む社会環境が道徳的に望ましいものではない、と感じられるのであれば、それを改良すべく努力するのが我々の務めであろう。勿論、社会環境の改変は容易なことではないだろう。しかしながら、その難題にたじろいで、現在の不正をただ坐して傍観している人は、変更不可能な運命法則への信仰にその身を託してしまった人と同様に、責任回避の誘いを免がれることはできないのである。